

プラネタリーヘルスと多様性〈長崎大学と多様性 Vol.5〉(2021年10月7日)

おはようございます。

長崎大学人、河野茂です。

山を歩いていると、自然の力を感じます。土を踏むと大地の力を、風が吹くと空の力を感じます。また、雨が降ったり、晴れたり、天候の変化が歩き方に直接影響を与えます。人と自然がつながりっていることを肌身で感じます。自分の健康が、自然の中で生まれている感覚もわかります。『プラネタリーヘルス』という言葉も、山歩きしていると単なる概念的な言葉でなく、生きたものと感じます。素晴らしいことに、今年のノーベル物理学賞を真鍋淑郎さんが地球温暖化とCO<sub>2</sub>の関係で受賞しました。

本日は、プラネタリーヘルス担当学長特別補佐 渡辺知保先生に、『プラネタリーヘルスと多様性』について解説してもらいます。

---

人間社会は健全な環境の上に成立している、ということは誰もが知っていて、今更いうまでもないだろう、と思う人が多いでしょう。それならばなぜ、様々なニュースが地球環境の危機を訴え、国連も乗り出すようなグローバルな取組みが行われているのでしょうか？

いくつかの理由が考えられます。

第一が、私たちは地球が思ったより小さいことを自覚していない、という点です。そのため、私たちの一挙一投足が地球やその上にとった生態系に影響を与えてしまうことに気がつかない、これが今流行っている“人新世”（アントロポセン）という状況の本質です。

第2に人類社会にとって“良い”ことが、地球生態系にとって必ずしも“良い”とは限らないという認識の不足です。端的に言えば、20世紀の特に後半、人間は自然の貯蓄を無造作に引き出して使うことによって、寿命とGDPを伸ばしたので、その分、現在の自然は“残高不足ぎりぎり”の状況にあります。

こうした状況への危機感から生まれたプラネタリーヘルス(PLH)は、地球—生態系—人間の社会と健康が、互いにどうつながっているのか、そのつながりをどうやったら改善できるのかを研究し、人間社会が健全な環境の上に成立するような活動をすすめることを意味します。この研究には、異分野の(たとえば健康と生態系と)専門家の連携が、実践的な活動には、アカデミア外の人々の参加が、それぞれ必要です。長崎大学が取り組むPLHが「分

野横断による課題解決」をうたっているのはこういうことなのだと私は解釈しています。

世界を見渡せば、生態系も多様、人間社会のありかたも多様で、両者の「関係」も当然多様であり、PLHの姿もその実現に至る道もやはり多様でしょう。PLHは本質的に多様性に富む状態で、世界中に均一な世界を登場させてきた現代社会の流れを出て、新たな一步を踏み出すものです。多くの研究機関がその重要性を認識し、多数プログラムが走っていますが、長崎大学のような全学的な取り組みは世界でも少数です。是非みなさんと一緒に、この新しい一步を進めたいと考えています。

PLH 推進を担当する政策企画室からツイッターによる新たな発信も始めました。コンテンツはまだ多くありませんが、これからどんどん充実させていきます。関心のある方は是非一度チェックしてみてください

[https://twitter.com/NU\\_planethealth](https://twitter.com/NU_planethealth)

渡辺知保（TMGH 教授、学長特別補佐・プラネタリーヘルス担当）

---

渡辺先生、ありがとうございました。

本学のスローガンである『プラネタリーヘルスに貢献する長崎大学』の実践的へ結びつけるように、してゆきたいですね。皆さん参考にしてもらえれば幸いです。ご意見、ご感想お待ちしております。

長崎大学 学長 河野 茂